

中部エネルギー市民会議 — 中間報告 —

「今後の活動に向けて」のみ抜粋版

◆ 呼びかけ人の意見（敬称略／投稿順）

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1. 今尾 忠之 2 | 7. 杉山 範子 6 |
| 2. 中根 桂子 2 | 8. 松原 武久 6 |
| 3. 佐藤 慎一 3 | 9. 水谷 香織 8 |
| 4. 関口 詩織 3 | 10. 木船 久雄 10 |
| 5. 小川 弘 4 | 11. 萩原 喜之 13 |
| 6. 水野 翔太 5 | |

◆ 賛同人、登壇者、協力者の意見（敬称略／投稿順）

- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| 1. 水野 雄介（協力者） 18 | 8. 平野 克彦（賛同人） . . . 24 |
| 2. 村中 尚樹（賛同人） 18 | 9. 前田 洋枝（賛同人） . . . 24 |
| 3. 井上 祥一郎（賛同人） 19 | 10. 荻田 章（賛同人） . . . 25 |
| 4. 高橋 美枝子（賛同人） 20 | 11. 山田 寿男（賛同人） . . . 26 |
| 5. 後藤 茂昭（賛同人） 21 | 12. 中川 卓治（賛同人） . . . 27 |
| 6. 渡邊 聡（賛同人） 22 | 13. 鈴木 夏織（賛同人） . . . 27 |
| 7. 平岩芳朗・福本一（登壇者／中部電力） 23 | |

◆ 呼びかけ人の意見

1. 今尾 忠之（呼びかけ人） 2014.1.14

■ 「中エネ会議」について思う事

中エネ会議の設立趣旨である「エネルギー問題を自分たちの課題として考え、客観的な情報を共有し、立場を超えて広く議論する場」ということについては、過去7回の会の開催において、それなりに達成してきたかと考えている。

その一つの見方として、一方の当事者である「中部電力」が、この手の場に対して有りがちな「軽く対応」という事ではなく、会社の中核である「経営戦略本部」が「原子力部」とともに各部長が当方との窓口となったことは、同会議に対して正面から向き合っている姿勢の表れであり、同会議を位置づける一つの指標ととらえることができると言えるのではないかと思う。

しかしながら3年前の発足会議には200人を超える参加者を得たにも拘らず、回を重ねるごとに参加者が減少して行ったことは、ある程度予測されていたことと言え、残念であるとともに、当方の力不足の感が否めない。

それ以上に21人の「呼びかけ人」も、現在の常時参加者は10人に満たないこと、事故後約3年を経過しようとしている現在において、エネルギー問題・原子力問題に「緊迫感」「切迫感」が薄れてきている「国民性」を考えると、参加者の減少は当然の結果といえようか。

しかし自民党政権となった後、「原子力」の位置づけが復活したかと思えば、小泉元首相の「原子力反対」発言に端を発し、東京都知事選に「原子力反対」を公約にして立候補すると言われている細川元首相の動向等々、ここに来てまた脚光を浴びる状況になってきた。

とは言えこれらの方針・方向に対し、十分な議論、十分な認識が国民にあると必ずしも言える状況ではなく、従前の「人任せ」的な状況にあると言えるのではないか。

そうした中同会議の位置づけ・必要性は今後ますます重要と考えるが、果たして一般住民にその「重要性」をどのように訴え、アピールできるか?? その解決策が見えてこないもどかしさを感じているものの、公平性を保ちつつ同会議の継続の必要性を強く思っている。

2. 中根 桂子（呼びかけ人） 2014.1.20

■ 中エネ会議での自分のスタンス、こだわり

あまり会議に参加できないのですが、こういった動き（賛成派＋反対派＋中立派が一緒になって学び、討論する）があるのだということを知ってもらい、というのが自分の役割かなあ。

■ 中エネ会議 1年間をふりかえって

先駆的な話し合いだと思った。似た者同士が集まって話しているだけでは伸展はあまり見られないが、自分と反対意見を聴くことで、理解できる部分もでてくるし、自分の想いを整理するという大切な作業にもなると思う。

■ 今後どのように展開を考えるか？

（私は参加できないと思うけれど）食べ物や飲み物（お酒）などがあると、もっとぐっと距離が縮まると思うので、そういった機会が増えるといいかもしれない。相手を知る、相手を好きになる、ということが大切なかもしれない。

3. 佐藤 慎一（呼びかけ人） 2014.1.20

■ 今後の活動に向けて

当時、原発事故により、この国のエネルギー供給について、どうしていけばいいのか、多くの市民が混迷していた。

こうした中、発足した本会議では、原発は必要と考える人と、原発は危険だからやめようという人、また、どちらにもあてはまらない考えの人たちが、対立し合うのではなく、一緒になって、この国のエネルギー問題について、市民レベルの目線で議論を重ねてきた。

これは、案外、簡単そうで、とてつもなく難しいこと。社会全体をみれば、多様な考え方をする人たちが、自主的に集まり議論した同様の会議は存在せず、改めて、この市民会議の役割と意義の大きさを感じる。

しかし、当然のごとく、こうすべきと結論がでる問題ではないため、多様な考えや立場を理解し合う場にこの会議はとどまる宿命でもあった。

今後の展開については、一定の役割を終えたと考え、収束にむけた議論を行うことが妥当と考えている。

4. 関口 詩織（呼びかけ人） 2014.1.24

■ 中エネ会議での自分のスタンス、こだわり

こだわり・意見は

人の僅かな過ちから、あまりにもたくさんの土地や人や他の生き物が、長期にわたって苦しむ発電方法だから、原子力から、もう少しリスクの少ないエネルギーに頼りたい。

また、一度始めてしまったとはいえ、再稼働はせずに、使用済み燃料の処理や労働者の健康などをどうするか考えたい。

今後のスタンスは

呼びかけ人として1年間僅かながらも関わってきたが、今後は自分の生活を変えることに重点を置いて活動していきたいので、呼びかけ人から退こうと思います。

■ 中エネ会議 1年間をふりかえって

どのようにして、エネルギー問題に向き合おうか？という悩みの中に自分がいたということと、距離的な制約もあって、あまり主体的に参加できなかったが、改めて自分の外を変えていくという行動はとても辛抱強く大変な作業であると思った。

というのも、この1年間で湧水のある土地で太陽光を使った（この発電法がどれほどのリスクがあるかは検証する必要があるが）小さい家を作る経験を通して、自分自身の暮らし方を変えることは、社会やほかの人を変えるよりもずっと簡単で早く出来るとわかったからだ。そしてなにより面白い。

■ 今後どのように展開を考えるか？

今年度も続くとしたら、最近、藻谷浩介氏の『里山資本主義』という本を読んで、原子力以外のエネルギー源でうまくいっている街について（スマートシティなど）についての講演もあるといいと思った。

1人でも思いがあり、この活動をやりたいという人がいるならば、中部地方がより素晴らしいところになるためにも、100年～1000年先のために種をまくというような気持ちで続くことを願っています。

■ その他、思いつくままに

わたし、を大切にすること、共に生きていこう、できれば楽しく！というポジティブな、心意気で、わたしも、いつ中部に戻るかは分かりませんが、これからも共に励ましあいながらより良い暮らしのあり方を探っていきたいです。1年間運営お疲れ様でした、ありがとうございました！ Positive vibrations yeah!

5. 小川 弘（呼びかけ人） 2014.1.26

■ 中エネ会議での自分のスタンス、こだわり

会社（JANUS）が原子力関係の仕事を中心に動いていましたので、表だって反対することは出来ません。また、私自信も即原子力発電の中止には疑問を感じます。

若いころ中部電力の以来で浜岡原子力発電所（以下浜岡）予定地のアセスを担当しましたが、その当時は何の問題も考えず、砂丘で上空の風向風速の測定のため風船を上げていました。その浜岡がなくなることなど、頭に置くことなど考えられませんでした。

しかし、現実を考えると浜岡の位置は東京にも近く、大動脈である新幹線や高速道路にも近いいため、福島のようなことが起きると日本の生活がどうなるか不安です。だからと言って日本の全原子力発電所の再稼働を止めていいものか、例えば安全の確認が取れた処から、災害があっても被害の対応が比較的簡単な発電所の一基ずつを稼働させる方法があると思います。

■ 中エネ会議 1年間をふりかえって

ほとんど出席できず申し訳ありません。現在三重県の大台町で暮らしております。呼びかけ人の方々の立派なことに感心しました。ただ、表だって意見を言うのは反対派の方々であり一般に言われる知識人の方々はほとんど意見を述べることは出来ないように感じました。このような会議はその時の多くの市民の意見に賛成の方や、このような場に慣れている方の意見が強くできるものなのでしょうか。

いずれにしても、事務局をやられて大変ご苦労さまです。予算もない中、会議の準備や進行をいろいろな処に配慮されて実施おり、よくやられるなど感心しております。

■ 今後どのように展開を考えるか？

着地点にない、このような会議を続けていくことは大変難しいことだと思います。具体的な次のような課題を決め実施されたら興味もわくように思われます。

- ・原子力発電の再稼働を全て中止し、他の発電で補った時の燃料とその費用について
- ・自然エネルギーの現時点での問題点
- ・特にバイオマス発電について

6. 水野 翔太（呼びかけ人） 2014.1.27

■ 中部エネルギー市民会議 振り返り

2011年3月11日の東日本大震災から早3年が経とうとしています。この地震は私たちに大きな影響をもたらしました。エネルギー問題、人との絆、コミュニティ…

この地震は忘れてはならないし、次の世代を担う私たちも伝えていかなければならない。

私は当時高校生で、2011年3月11日は名古屋の競技場で部活動をしていました。そして家に帰ると見たことのない光景がテレビに映し出されていました。衝撃的でした。東北の人のお手伝いがしたい。なにか助けられることはないかと考えましたが、ベストな答えは見つからず、また被災者の気持ちも考え、東北に行くことさえを躊躇していました。もどかしさを感じたのを確かに覚えています。

震災の約1年後、国が主導的にエネルギー政策を決定するのではなく、自分たちのエネルギーのことだから、一人ひとりが地域の将来を決定していくんだ！という意識を持ち、私たちがエネルギー政策に積極的に参画・関与していける場として「中部エネルギー市民会議」が発足され、私も呼びかけ人として最年少でメンバーに名を連ねました。しかし、他の方を見てみると原子力を専門にしている方や経済界を担っている方、NPOで最前線に行く方の名前も入っていました。私はそんなところに名を連ねてもいいのかと不安を感じました。

しかし、「高校生」という視点から今回の震災、そして原発事故を考え、社会に発信していくことを強みにしようと考え、今まで皆さんと取り組んできました。いろんな方の講演会に行ったりし、勉強もしました。今でももちろん知識や現場の実体験では他の呼びかけ人には劣ることでしょう。しかし、熱い想い、次の世代にも伝えていくことの重要性は負けてはいないことだと勝手に感じています。

私は今まで原発再稼働に賛成・反対ということは一切口にしませんでしたし、これからも口にはしないことでしょう。中部エネルギー市民会議に名を連ねている限りは、中立的な立場でいることが重要だと私は考えているからです。賛成を突き通すと反対意見を取り入れることができない。逆の場合もそうです。私は賛成意見・反対意見をしっかり聞き、そして自分で分析することでおのずと自分の立場が見えてくるかと思っています。原発事故を考えることも大変重要ですが、周りの意見をしっかり聞き、もちろん自分の軸をぶらさないで取り入れていくことの方が重要だと思います。一見、原発問題から逃げているようにも思われるかもしれませんが、私は様々な方からの意見を参考にし、自分の意見を構築していくことの方に重きを置いていきます。

さて、私事になりますが、現在は地元の名古屋を離れ東京の大学に通っています。そこで国会事故調査委員会の事務局の方とお会いし、現在はわかりやすいプロジェクト国会事故調編を立ち上げ、次の世代を担う人に原発事故を風化させないために国会事故調査委員会の報告書をわかりやすくするという取り組みをしています。中部エネルギー市民会議にもこのように次の世代になにかを伝えられる組織にすることが今後、求められるのではないのでしょうか？また、このわかりやすいプロジェクト国会事故調編の方を始め、様々なところと協力をしていくことも必要になってくるかと私は考えております。

原発事故。口にすることは簡単です。その口にしたことを実行に移し、そして社会に影響をもたらす、国民に意識・関心を持ってもらう。さらには次の世代に伝えていく。そんな場に「中部エネルギー市民会議」はなることを私は望むとともに、今後も「中部エネルギー市民会議」で原発事故を考えていきたいと思っております。

現在は高校生ではなく大学生となりましたが、次の世代を担う一人として今後も継続的に取り組んでいきたいと考えております。どうぞ、よろしく願いいたします。

7. 杉山 範子（呼びかけ人） 2014.1.28

■ 今後の活動に向けて

2012年3月4日、未明のベルリンで、第1回の中部エネルギー市民会議をインターネット中継で見たことを覚えています。当時、私は名古屋大学の若手研究者派遣プログラムで、半年間、ドイツのベルリン自由大学環境政策研究所にいました。脱原発の政策を早い段階で決定したドイツについて、現地で「どうしてドイツは脱原発を決断できたのか？」と尋ねると、「どうして日本は脱原発を決断できないのか？」「フクシマはドイツにあるんじゃない、日本にあるのに。」と言われ、答えに詰まってしまうことが度々ありました。

今から振り返ってみると、東日本大震災・福島原発事故以前の私は、原子力発電に対して明確な意見を持ち合せていませんでした。正確に言えば、反対でありながらも、確信を持っていなかったといった方がいいかもしれません。そんな私には、「フクシマ」は大きな衝撃であり、自分がこれまで原子力発電について自分事として考えていなかったことを反省すると同時に、多くの情報の中でいったい何が真実なのか、感情的にならず冷静に判断するために、もっと正確な情報が知りたいと感じるようになりました。

そんな私にとって、中部エネルギー市民会議は、このような疑問や不安を多くの人々と共有し、解消するための重要な場だと考えています。この意味では、これまでに開催した中部エネルギー市民会議では、参加者の皆さんと共に、様々な意見について耳を傾けることができました。これは成果の一つではないでしょうか。また、残念だったことは、中部エネルギー市民会議が発足した当初は多くの人々が集まったのに、回を重ねるにつれて参加者が減っていったことでした。エネルギー問題はもう「喉元を過ぎ」てしまったのでしょうか？

半年間ではありましたが、私はドイツから日本を客観的に見る機会を得ることができました。「フクシマ」をきっかけに各地で市民が行った大規模なデモ、最終的には有識者らの提言を受けて脱原発を決断したドイツ政府。市民は意思表示をして政治に要求する、それを受けて政治はあらゆる情報を踏まえて決断する…「どうして日本にはできないのか」という私の問いに、ベルリン自由大学の教授は当初「日本は市民パワーが足りないかもね」と答えましたが、私が帰国する前には、首相官邸前で行われるデモのニュースを見て「日本でもいろいろな動きが出てきた、これからかもよ」と元気づけてくれました。

この中部エネルギー市民会議の場を通じて、私は改めて「エネルギー」が、現代の私たちの生活にとってなくてはならないものであり、地域の様々な問題と関連していることを理解しました。さらに、単純に原発に賛成か反対かではなく、真に「持続可能な地域」を創っていくために、この地域はどのようなシステムを構築していなければならないのか、真剣に考えなければならない段階に来ていると思います。できない理由を並べるのはもう止めて、自分たちやこれからの世代のために、この地域をどうしていきたいのかというビジョンを創り、それに向けて今からできることを見つけていきませんか。中部エネルギー市民会議が、この地域のあらゆる世代の人々が集まり、未来を議論する場にもなればと望んでいます。

8. 松原 武久（呼びかけ人） 2014.2.17

■ 中部エネルギー市民会議のこれまで、これから

私の手元に2012.3.24中エネ会議での発言メモがある。中エネの2回目の会合のようである。3.11の東北大震災とそれに伴う巨大津波は東北沿岸各地に未曾有の被害をもとらした。特に福島第一原発の過酷事故は今後の日本のエネルギー問題に深刻な影響を与えるという現状認識に立ち以下のように述べた。

① 脱原発依存

- ・現在の産業経済状況(円安、原油高)、エネルギーに過度に依存する市民生活の状況(典型例・暖房便座等)を見て電力は必要不可欠、精神的耐乏論はナンセンス
- ・風力、太陽光等再生エネルギーは電力量、稼働率、時間軸で考えて当面代替エネルギーになり得ないし、必要量達成までの行程表あいまい
- ・天然ガスは量、環境負荷の面から見てベターだがコスト、エネルギー安全保障面で不安
- ・地域分散型のバイオマス発電等、量的、時間的に期待薄
- ・水力はダム湛水能力の経年劣化、開発可能地域の限定等で期待薄
- ・地熱発電、メタンハイドレート等の新エネルギーは技術、コスト面で未知数
- ・エネルギーのベストミックスの立場に立っても、当面最小限の原発に依存は不可避

即原発廃止論は代替エネルギー開発の技術、方法、コスト、行程表があいまいであり、責任をとらない者の理想論に思える。以上の理由により国民的大議論により段階的に原発依存度を下げる立場を取る

② 原発再稼働

- ・第一原発事故の調査結果纏まっていない、地震か津波か
- ・事業者の丁寧な説明・情報開示、地元理解、市民理解、国会での議論、政府の責任で判断するという手順を踏む
- ・政府、研究機関、規制機関、各種専門委員会等総力挙げて安全策を示す
- ・安全策の開示と徹底した議論 ～疑問に答える～
- ・安全策は一次ストレステストだけでなくシビアアクシデント対策を明示した二次ストレステストは必須

以上の手順を経て責任を取れる者(政府)が最終判断する

③ その他

- ・役員報酬、広報予算、交付金等、安全・安心と別次元の議論多すぎ
- ・電気料金の高騰により産業競争力を削ぐという一種の脅迫は逆効果
- ・安心と安全はイコールではない。必要な情報を全て開示し、科学的、合理的に説明し、安全を安心に近づけるより仕方がない

概要、上記3点を話したが全部述べる時間がなかったと記憶しているが、「人間の力で制御出来ない原発を作ったのは神への冒瀆」という賢しげな議論は不毛であるという思いは今でも変わらない。原発を夢のエネルギーだとして国民が喜んで受け入れた側面がある、合成の誤謬だと言ってもよい。

あれから2年経った。中エネ会議の中間報告にあるように7回の市民会議、7回のなごや環境大学基礎講座が開催され、それなりの成果はあったが参加者の漸減、議論の内容の固定化・這い回り、発言者の偏り等、熟議の場から一定の方向性をという初期の目的を達成出来たとは言えない状況にある。

3.11からもうすぐ3年、寺田寅彦のいうように「天災は忘れた頃」ではなく、風水害を含めればかなりの頻度で災害は起きている。ここ2週間、週末は大雪で死者がでる状況。停電、道路不通で大混乱、文明の脆さを痛感。それに加えて南海トラフ巨大地震の被害予測（東北大地震と比較にならないくらい深刻）、ハザードマップ作成等、身近な危機について情報は盛りたくさん。けれど、民間の防災対策は遅々として進んでいない。耐震診断も耐震補強も防火対策も、

阪神大震災の時は避難路の確認も含めて図上訓練まででしたが今はそんな切迫感はない。エコマネー、みんなで減らそうCO2、スマートハウス、コンパクトシティ、ライフスタイル変換議論も皆低調。1次、2次オイルショックの際の狂乱的な生活防衛とまではいかなくても藤前埋め立騒動の際の「渡り鳥か人間か」というような価値葛藤が原発事故に関連して起きないのが不思議。官邸前の原発デモは結局市民レベルでのライフスタイル変換運動に結びつかなかった。

以上の経過を受けて中エネのこれからについて、呼び掛け人としての思いを箇条的に、

① なし崩し的に原発再稼働する事の危うさの徹底的な学習

- ・ 福島汚染水の状況、放射線量、総量、増加の状況、放射線除去技術、進捗状況
- ・ 避難区域の現状、放射線量、放射線に起因する病気の状況、除去した土壌等の始末
- ・ 規制委員会の権能、規制委員の資質・能力、再稼働までの手続き
- ・ 各原発毎の使用済み燃料の保管状況と保管場所の残容量、中間貯蔵場所の選定

② 原発再稼働の責任と過酷事故に対する総合的取組みについての学習

- ・ 電力事業者、規制委員会、政府それぞれの責任と情報の公開
- ・ 過酷事故を想定した防災、事故対応マニュアル
- ・ 過酷事故の際の対応組織と権限、新たな法律と組織、権限

③ 国のエネルギー基本政策についての各分野、各レベルでの学習

- ・ 少子高齢化の進展と今後の必要エネルギー量
- ・ 省エネルギーに向けての新技术の開発とそのスピード、実用性
- ・ 省エネルギー教育、エネルギー読本の作成、教育課程への位置付け
- ・ 省エネルギーと街づくり、コンパクトシティ化、スマートハウス、スマートタウン

以上思いつくまま、箇条的に上げたが、①の議論をする中で、価値葛藤場面があちこちに生まれ、地についた省エネルギー機運が高まればよい。②について、原発は政府管理にすべきという立場、規制だらけのまま民間に任せれば必ずコスト高になるし、原発過酷事故対策に関する新たな法律と組織が必要になる。いずれにしても①と②は問題が大きく、深く、広範にわたるので中エネの熟議の場でこなしきれぬか自信がない。③については街づくりの長期計画として防災都市づくりにリンクしての提言は可能ではないか。エネルギー問題は今後のライフスタイルの問題として実践まで踏み込んで議論出来るし、読本という形で目に見える成果として示せるのではないか。

9. 水谷 香織（呼びかけ人） 2014.2.28

■ 中エネ会議での自分のスタンス、こだわり

● 4歳と2歳の子どもを持つ“母”として

3.11の時、1歳の子の手を引く9ヶ月の妊婦でした。地震・津波の後の原発事故、及びその後の政府対応等を見て、「妊婦が安心して子どもを産めない社会は衰退する」と直感的に思いました。出産後、「自分にも何かできることはないか」と止むにやまれぬ気持ちから、中エネ会議に参画させていただきました。小さい子どもを持つ“母”ですので、時間的制約が大きく、週末や平日夜の活動は非常に厳しいです。参加をしてみて気づいたこととしては、“母”を強調するのもどうかと。自分の中で生まれてくる気持ちや思考が、母だからなのか区別がしに

くいことと、他の方にお聞きすると“父”や“祖父”でおありとのことですので、あえて強調する必要もないのかなと思いました。

● 社会的合意形成支援のプロとして

高校生の時、長良川河口堰の建設是非で揉めていたのをニュースで知り、もっと良い計画の方法があると思いました。その後、大学で土木計画を専攻し学位取得後、社会的合意形成を専門とする会社を設立しました。想いだけで突っ走ってきたところがあり、中エネも同じような気持ちではじめましたが、どうも途中で胸が苦しくなりました。八百屋さんに例えると、お店に陳列している売り物の野菜を、いつどこで誰にどのくらいであったら無償で提供できるのか、という悩みです。ポイントは、無償で提供した売り物の原価の損失よりも、売り物が無くなってしまったことによる収入の減少です。自分の場合、合意形成のコンサルティングという目に見えないもの、あえて言うならば自分の時間、が売り物です。しかも、社員の給与を支払っていかないといけない経営者の立場で、母としての時間制約も加わる中、無償ボランティアというはじめての活動に対して、上手く時間配分をすることができず、事務局の皆さんにご迷惑をお掛けしてしまいました。申し訳ございませんでした。

■ 中エネ会議 1年間でふりかえって

上記の理由から、全く貢献しませんでした。

■ 今後どのように展開を考えるか？

中エネの現状について、詳細をキャッチアップできていませんので、自分は何ならできかに限定して申し上げます。

● 社会的合意形成の観点から自分の考えを述べること

中エネが対象とするエネルギーの社会課題について、社会的合意形成の観点から自分の考え方を述べることはできると思います。活動を始める前は、自宅のコンセントの向こう側に何があるのかなんて考えたこともなく、エネルギーのことをいくら説明いただいてもちんぷんかんぷんで、毎朝届く中日新聞の1面や2面の記事さえ興味があつて読もうとしても全く意味が分からず読めませんでした。当初の中エネの活動のお陰で、少し親しみが持て、エネルギー問題の全体像と部分が少しずつ分かってきました。準備期間を入れてあれから2年ほど経ちますが、今なら少し自分の考えが言えそうです。

● エネルギーに関心のない方々へのアプローチとして

高レベル放射性廃棄物について、ゲーム感覚で議論し学習する「NUMOMO（ニューモモ）ストーリー」を独自開発しました。右図の指示書が渡され、5～6人のグループで1時間ほど議論し、自分たちの考えをまとめます。現実離れたストーリーとミッションですので、楽しく議論できます。全体でグループ発表をした後、「実はNUMOMOは…」と、話を切り出します。そうすると、とても真剣に話を聴いて下さります。最後の情報提供の仕方は難しいですが、きっと、その後もニュース等で高レベル放射性廃棄物の話に触れる度、少しは気にされるのではないかなと思います。こ

NUMOMOストーリー

ある日突然、我が_____国の上空にUFOが表れ、
「君たちの先祖から一時的に預かったNUMOMOを返却する期限が近づいている。1年後の今日、再び表れるので、皆で合意した保管or処分方法を教えてほしい。」
というメッセージが送られてきた。

NUMOMOとは、神の力でエネルギーを得た人類が、その代償として残した円筒物である。高さ1.3m、直径40cm、重量約500kg。直接接触すると20秒で死んでしまう。これが2万本あるらしい。この力が衰えるには、数万年以上かかる。何とかして、人間の生活環境から隔離しなくてはならない。

さあ、_____国の国民として、
君たちは、NUMOMOをどうするか？
知恵を絞り、良い方法を編み出してくれ。



<http://www.h-taguchi.info/P4Ka.html>

の「NUMOMO ストーリー」なら、中エネで無償提供することは可能です。同様にエネルギーの問題を楽しい学習プログラムにすることも可能です。開発費はコストがかかりますのでその部分は何か工夫をしないとはいけませんが、できたものは無償提供できると思います。

10. 木船 久雄（呼びかけ人） 2014.3.10

■ はじめに

中部エネルギー市民会議の第1回会合が開かれたのは、東日本大震災とそれに続く福島第一原子力発電所事故から1年後の2012年3月のことである。早いものでそれから2年、大震災からは3年が経とうとしている。

萩原さんからの一本の電話によって、私はこの会議の呼びかけ人の一人として名を連ねることになった。さらに、おっとり刀で出かけた事前打ち合わせの場では、嫌とも言えず、第1回会合でのプレゼン役を引き受けることになる。プレゼン内容は、公的機関が最初に公開した「事故調査報告」の解説である。「畑村委員会『中間報告』の概要—東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会報告—」が、それだ。これによって、「呼びかけ人」の責の一端を名実ともに担ってしまったものだから、それ以降も会合には欠かさず出席してきた。

この小論では、会合出席を通じて得た成果や課題を述べてみたい。

■ 1. 期待

今思えば、全ての会合に出席しなければと自身を駆り立てたのは、この「中部エネルギー市民会議」という組織体への期待と自らの職業意識であったと思う。

様々な立場の市民が集まって、エネルギーや電力問題を自由に語り合おう。そして、市民の視点からエネルギー政策や供給のあり方を考え、政策の方向性を示したい、というのがこの会議の目的であった。日本のエネルギー政策のあり方を議論するには、国際政治やエネルギー技術、環境問題、さらには国民経済への影響など、生活感覚に留まらない相当な事前知識と覚悟が必要だ。この会議は情報提供と議論を通じて、エネルギー問題への理解を深めたうえで、市民自らがエネルギー政策を提案しようというのだ。容易なことではないが、それができたら素晴らしい。

私自身、それまでも大学主催の公開講座や自治体主催の生涯学習などの場を借りて、市民向けにエネルギー問題を語ってきた。「暮らしの中の省エネルギー」といった話題であれば、聴衆は生活上の等身大の問題として理解し、合点した反応をする。しかし、中東情勢や欧米諸国を巻き込んだエネルギー地政学、安全保障と原子力協定といった話になると、「エネルギー問題は難しい」となりがちだ。それらは、日常の生活感覚とはかけ離れた別の世界の出来事で、一般に興味関心レベルは低い。中部エネルギー市民会議は、この難問に果敢に挑戦しようというのだから、期待は大きい。

また、福島原発事故は一般にどのように捉えられているのか、その生の声を聞いてみたい、という思いもあった。とりわけ、原子力発電に対する賛成反対はどのような認識の上に語られるのだろうか。放射線は目に見えなくて怖い、危なそうだから駄目だ。そんな単純なものではないだろう。その辺りの素直な意見を聞いてみたい。そんな思いもあった。

■ 2. 職業意識

一方、自身の職業意識とは、エネルギー経済学の研究者の一人としての思いである。自らがエネルギー問題と本格的に関わるようになったのは、1980年前後のことである。大学院時代の研究テーマは「資源貿易の理論と実際」であり、その縁で1981年4月に日本エネルギー経済

研究所の研究者として職を得た。

研究所に入所した頃、世間のエネルギー問題への関心レベルは相当に高かったように思う。イラン革命に端を発した第二次石油ショックによって、原油価格が未曾有の高値で推移していたからである。日本を含め主要国のエネルギー政策の3本柱は、①省エネルギー促進、②新エネルギー開発（サンシャイン計画）、③石油代替エネルギー（原子力・石炭・天然ガス）導入とされた。それから30年余を経た今もまだ、これらは依然としてエネルギー政策の重点施策であり続けている。

90年代に入ると、これに地球温暖化問題への対応が加わった。温暖化ガスやである二酸化炭素を排出しないエネルギー源（原子力、再生可能エネルギー）への転換は、温暖化対策のカギとなる。さらに、2000年代に入ると石油を筆頭とする化石燃料価格の値上がりから、世界的に原子力への期待が高まった。スリーマイル島原発事故（1979年）以降、新規の原発建設が無かった米国で、新設の原発が計画され原子力規制委員会から認可が出された。段階的な原子力全廃を決議していたドイツでも、廃止時期が繰り延べられた。加えて、経済成長とともに電力需要が急増する中国やインドをはじめとした新興国では、大規模な原子力建設計画を公表した。それが「原子力カルネッサンス」である。

そして2011年3月。東日本大震災が起こり全電源を失った福島第1原発は炉心冷却ができなくなり、メルトダウンという大事故を惹き起こした。事故による放射能汚染は、当該地域の住民の生活や経済を破壊しただけでなく、震災後の復興速度をも著しく減じている。原子力の安全神話が瓦解しただけでなく、エネルギー政策に絡んだ政府や電力会社や専門家の信用をも失墜させた。原子力の社会的受容性は、福島原発事故以前においても国論を二分するようなテーマであったが、この事故を契機に反原発ムーブメントは一気に拡大した。

以前にも日本で大規模な反原発運動が展開された時期がある。それは、チェルノブイリ原発事故があった1986年後のことである。ジャーナリストの広瀬隆氏がこの事故を題材として書いた『危険な話』が発端となり、反原発運動は広がりを見せた。

当時、自身が関わった研究の一つに「原子力なかりせばシミュレーション」がある。原子力発電を無くしてしまうと、原油をはじめとするエネルギーの価格はどうなるか、それによって日本のGDPや物価や世帯当たりの所得はどうなるか。それを計量経済モデルによって推計しようというものだ。

手元に資料はなく詳細は忘れてしまったが、シミュレーション結果は次のようなものであった。原子力が無ければ、間違いなく原油をはじめエネルギー全般の価格は高くなる。それが一般物価の上昇をもたらすとともに実質GDPを低下させ、世帯当たり所得を低下させる。また、その影響の大きさはフェーズアウトの仕方によっても異なる。加えて産業別や所得階層別でも影響の程度は異なり、エネルギー多消費型産業（鉄鋼、化学、窯業土石、紙パルプなど）や低所得者層への影響がより甚大である。概略このようなまとめをしたように思う。

今回の中部エネルギー市民会議への参加は、長年エネルギー問題の研究に携わってきた者の職業意識と責任のなせる業だと考えている。発言はできるだけ客観的に中立的に、と心掛けたつもりだが、実際はどうであったかは判らない。私自身、研究活動を通じてエネルギー業界に知己は多い。エネルギー供給において経済性や安定性を重視する産業界、そして国の政策当局者の苦心や考え方も理解している心算だ。「原子力村」の住人ではないものの、その隣村あたりの住民であることも否定しない。そのため、自身の発言が政府や産業界に偏ったものであったとしたら、この場を借りて深謝申し上げたい。

■ 3. 成果

さて、数次にわたる市民会議は、毎回、情報満載であった。反原発派からのプレゼンもあったし、電力供給を担う中部電力からのそれもあった。また、会議参加者が少人数グループに分かれて意見交換するワークショップも複数回行った。

ワークショップでは、私自身も一人の市民として多様な立場の人たちと意見交換の機会を得た。これは大変貴重な経験であった。小さなお子さんを抱える主婦は、「放射線測定器を持参して公園に行っている」、「成長期にある子供のことを考えると微量な放射線も怖い」、「何が正しい情報か、さっぱり判らない」そんな発言をしていた。

原発事故から1年以上も経った後でも、政府は腰の据わらぬ対応に明け暮れていたし、メディアも恐怖心を煽るような報道が多かったように思う。客観的かつ正確な情報を提供し、それを正しく理解して貰うことの難しさを改めて実感した。

「正確な情報」の中には、「今の科学ではここまでは解っているが、ここからは解らない」という現代科学の限界を示す情報も含まれる。専門家は「ここからは解らない」という領域についても、「解らない」けれども「おそらくこうだ」と各自の判断力や立場に基づいて解説する。それが専門家の専門家たるゆえんなのだが、専門家たちから異なる情報を聞かされて、一般大衆はいよいよ混乱する。

そんな場面もあったと思う。しかし、様々な立場の専門家から話を聞き、それをネタに議論する。こうした積み重ねが、広く市民のエネルギー問題（原子力問題）への理解を深めることにつながるのだろう。

そう思う反面、これによって原子力に対する考え方に関して、参加者の合意形成に結びついていったか、と問われれば「まだまだ」だと言わざるを得ない。原子力に賛成か反対かと問われれば、勉強会と意見交換会は行ってきたものの相変わらず平行線、となろう。これは、双方の論点がかみ合っていないことに原因があるように思う。

原発反対論者は、①事故がもたらす巨大リスクや②処理方法が定まっていない廃棄物問題を強調する。一方、賛成論者は①国際的観点からのエネルギー安全保障や②経済性を重視する。立場が異なる者は、それぞれ得意な土俵で議論しがちなため、議論が噛み合わない場面も少なかつたように思う（表1参考）。

表1 原子力発電の反対・賛成で主張される論点

【反対派の論点】

- ◆ 安全神話の崩壊
 - ・ 事故による巨大なリスクが存在
 - ・ 放射線による健康不安がある
 - ・ 事故が起これば地域経済は崩壊する
 - ・ 事故による高い社会的費用
- ◆ 経済性神話の崩壊
 - ・ 原子力は安くない～損害賠償や政策費用を加味すれば原子力は高い
- ◆ 環境親和性の崩壊
 - ・ CO2 は出さないが、事故が起これば甚大な放射線汚染がある
- ◆ 新增設や再稼働の困難性
 - ・ 原子力の社会的受容性が無い
 - ・ 再稼働すら許容されない
- ◆ 放射性廃棄物の処分問題が未解決

【賛成派の論点】

- ◆ エネルギー安全保障に貢献
 - ・ 原子力は準国産エネルギー
 - ・ 化石燃料の調達交渉力を得る
- ◆ 国際的な責務
 - ・ 国際的核管理に貢献できる
 - ・ 原子力利用・安全技術に貢献
 - ・ アジア諸国の原発増設と技術支援
- ◆ 原子力の技術維持と国際競争力
 - ・ 技術基盤と人材の確保
 - ・ 原子力産業の外貨獲得
- ◆ 既存原子力の経済性
 - ・ 電気料金の値上げを抑制
 - ・ 産業空洞化の回避
- ◆ 依然、原子力は温暖化対策のカギ
- ◆ 廃止しても処分問題は残る

■ 4. 課題

中部エネルギー市民会議を通じたこれまでの議論の中で、まだ触れていないテーマが幾つかあるように思う。しかも、それらの中には資源の無い国日本のエネルギー政策を構想する上で検討が不可欠なものも残されている。

それらは、①日本を取り巻く国際エネルギー市場、②原子力発電と日米安全保障、③地球温暖化問題における原子力の役割、④経済的なエネルギー供給の在り方、⑤現実的な脱原発シナリオとその課題、⑥原子力関連技術のイノベーション、などである。

原子力発電を止めて再生可能エネルギーに依存すれば、それで万事解決だと考える人がいるようだ。現実はそのようではない。電気料金は値上がりするし、停電の可能性も高くなる。今のような快適な生活は諦めざるを得ないだろう。少なくともここ10年～20年は、原子力失くして、安価で安定的な電力供給などは望めない。それが現実だし、脱原子力を決めたドイツでさえ同様の認識である。

そうだとはいえ、安心安全な暮らしは我々が生きていく上での必要最低条件である。とりわけ電力という生活に不可欠な社会インフラが、危険なものであって良いわけが無い。中部エネルギー市民会議がすべきことは、現実を直視しながら、望ましい将来の姿を描くことではないか。活動家のアジテーションは論外であるし、明らかな画餅ではリアリティが無い。勿論、多くの人が満点をつける解を見つけることは難しい。しかし、そのための一助となり、解のヒントとなるような将来像を描くことができれば、中部エネルギー市民会議の活動は大いに意味があったと思う。

■ おわりに

この原稿は、東日本大震災から3年を迎えようというタイミングに書いている。テレビや新聞は、大震災と福島原発事故を忘却の彼方におかぬよう、当時の映像と得られた教訓を繰り返し報道している。被災者がおかれた厳しい現実、見るもの聞く者の同情を禁じえないし、このような災難が二度とあってはならない、と強く思う。また、津波やシビアアクシデント対策を怠った東京電力や原子力安全保安院が批難されて当然だとも思う。

しかし、さらに追及すべきは震災当時の為政者たちの言動や責任である。震災の翌日に福島原発を訪れた菅直人首相の呆れた行為は言うに及ばず、同氏は、原子力災害対策措置法や「原子力災害対策マニュアル」をも無視している。曖昧な情報によって不必要な避難を強いたり、風評被害を増幅させたのも当時の政権である。

被災者の厳しい現実の一端は、菅政権の人為的エラーに由来していると言っても過言ではない。いわんや、失政を糊塗するための同氏の反原発運動など語るに落ちた。マスメディアは、当時の政府対応についてもっと問うべきだと思う。

11. 萩原 喜之（呼びかけ人） 2014.4.17

■ 中エネの1年を振り返る。

- ① 見ようとしていなかった課題が見えてきた。
- ② 人々の「不信感と不安感」の正体と「納得と了解」の仕方。
- ③ 私はマイノリティ。中電をどう見ているのか。（企業は社会的器官）
- ④ 中エネ会議のむずかしさ。
- ⑤ 持続可能性から見たエネルギー問題。
- ⑥ 深い信頼関係。

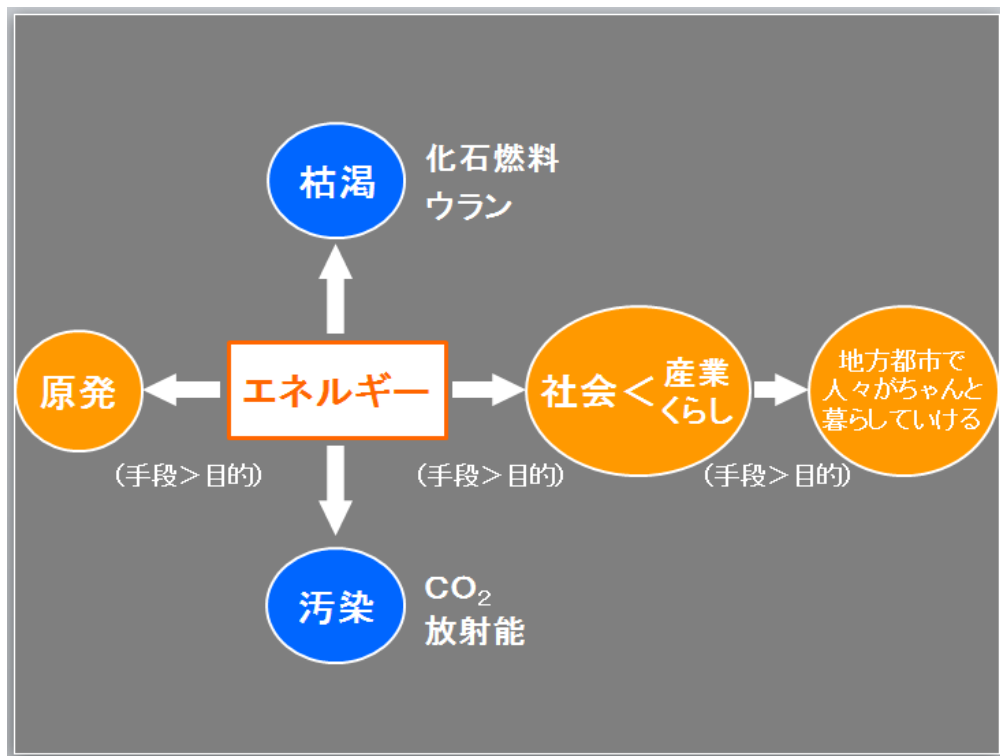
■ 1. 見ようとしていなかった課題が見えてきた。

中エネ開催当初は、客観的事実と積み重ねていくと答えが見えてくるのではという期待がありました。しかし、様々な専門家の意見を聞いてみると、その人がどんな立場なのかで客観的事実のとらえ方が違って聞こえます。

それは、「①原子力発電」は「②エネルギー」のために、エネルギーは「③産業（＝社会システム）」のために、産業は「④くらし」を支えていくために存在しています。原子力発電を考えると、エネルギー、産業、くらし、さらにそこに地域間の公平性や世代間の公平性という持続可能性まで包含した議論が必要となります。（そして「幸せとは何か」という世界観的なテーマも存在してきます。）

出口が見えないのは当たり前で、今回の原発事故、中エネ会議で見つけたものは、今まで私が目を背けてきた事実と、その課題が見えるようになったということです。

課題が見えたなら、その課題解決に向き合うことができます。目を背けない限り。



■ 2. 人々の「不信感と不安感」の正体と「納得と了解」の仕方。

3.11 という天災と福島原発事故という人災からくる多くの人々の「もどかしさ」はどこからきているのだろうかということの中エネ会議を通して探ってきました。

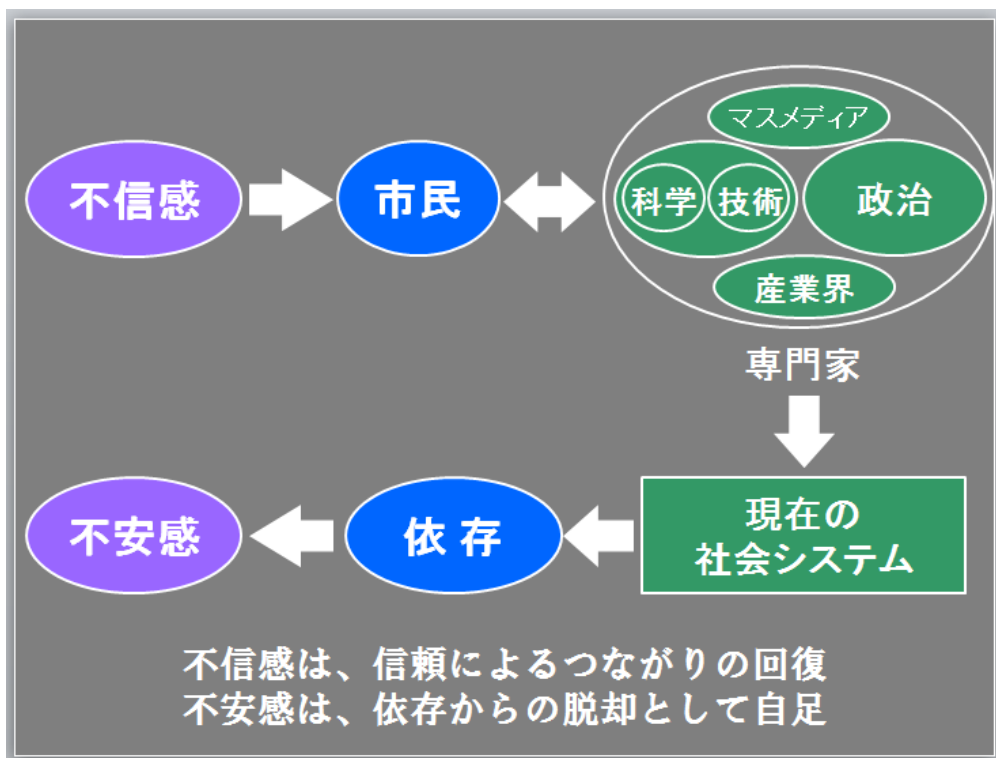
多くの人々は、放射能汚染に対し不安をいだきました。第2にくらしを支える電気が足りなくなるのではという不安を持ちました。（まさに持続可能性の2大テーマ「汚染」と「枯渇」問題です。）

電気も放射能もともに目に見えないばかりか、頭で理解するためには高度な専門知識を必要とします。それは自分たちでは解決できない高度な専門領域の課題ということでもあります。自分ではなんともならないというのがもどかしさの一因なのでしょう。

さらに、その専門領域を担っている専門家に対しての不信感があります。しかし私たちの生活基盤はその不信感を持つ専門家たちが創り上げた高度で複雑なシステムの上に成り立ってしまっています。そのシステムがないと私たちの生活は成り立たないのです。この依存していることからくる不安定がひそんでいるのだと感じました。

依存からの脱却は、その仕組みを自らたちの手で創り上げるということです。この自足という取り組みから、不安感からの脱却が可能となりますが、現在の高度なエネルギーシステムは存在し続けます。そのシステムを創り上げ、維持している専門家の人々に対する信頼関係を取り戻すことも同時に必要なのです。

私は、現在の社会システムに目を背けずに向き合い、信頼できる状態をつくる努力をすることと、自分たちで持続可能な地域を創り出していくということを同時に行う必要を感じています。



■ 3. 私はマイノリティ。中電をどう見ているのか。（企業は社会的器官）

私は中電（地域にある会社）をどう見ているのか？ その考えが他の人々とかなり違っているのだと思いました。

30年前の風景です。当時から環境NPOと電力会社は水と油、対立するものとして存在しているというのが常識でした。しかし、地域のエネルギーの持続可能性を探ろうとすると、地域に唯一存在している中電と向き合う必要性があると接触してきました。そのことが、他の環境NPOから、中電と付き合っている＝原発推進ととらえられてきたことも承知しています。（私自身は原発は廃止すべきという考えです。念のため）

今回の発見は、地域にある会社＝社会的器官であるというとらえ方に対する違和感でした。中電＝原発でなく、中電＝地域のエネルギーを担っている会社ととらえています。ですから、地域にある企業として地域を支えてくれる企業であってほしいという認識に立っています。

地域にある大切な企業だとすれば、地域に住む一員として困っているときは支えることは極自然な行為です。かつてあった地元企業、松坂屋、東海銀行のようにならないようにです。

リーマンショックのとき、トヨタ自動車は大量の期間労働者の解雇が必要となりました。そのとき、どれだけのまわりの飲食店などから「家にひとりよこしなよ」という声がかかったでしょうか。地域の企業が困っているなら、地域の人たちが支えるという社会であってほしいのです。地域とともにある企業像というものはそういうものです。いつの間にか、地域とともに存在しなくなってしまっていないかと感じた出来事でした。

1999年、名古屋市の出来事です。当時の名古屋市長はごみ非常事態に対し、排出者である市民、企業に「今の事態は行政だけでは解決できない。排出者の皆さんも手伝って下さい。」と頭を下げました。

困ったときに誰を頼るのかで、地域とともにあるのかが見えてしまいます。中電は今、地域の電気の利用者である市民、企業に対し、本気で向き合う気持ちを持っているかが問われています。

と言うものの、そんな私の思いは中電の方々には理解されているとは思っていません。私たちごときの小さな動きに対しては、余計なお節介だと思われるように感じます。しかし、中電の方々にどう思われようが、地域のインフラ＝私たちに必要なものにとらえていますから、余計なお節介は止めるつもりはありません。

この、中電は地域の大切な企業＝インフラという認識は、少数派なのだとつくづく感じた1年でした。

しかし、地域を支えていくのは地域の構成員なので、行政であれ、企業、NPOであれ、どこも良い組織であってほしいのです。そうでないと持続可能な社会は訪れないと考えているからです。

■ 4. 中エネ会議のむずかしさ。

今まで、34年間の環境活動を通していろいろな体験をしてきましたが、この中エネ会議が一番難しい事を始めたのだと痛感しています。

中エネ会議は、①議論の場の提供、②信頼される情報提供、③中部地域のエネルギーの方向性を見出すことを目的として、福島原発事故をきっかけに、中エネ会議を立ち上げました。この3年間、いまだ解決の目途さえたっていないと思えないのに、中エネ会議への参加者は減少傾向にあります。いくつか考えられる点を挙げてみます。

① 出口のない議論、方向性が定まっていない議論は敬遠される？

まず、第一に挙げなくてはいけないのは、この地域のエネルギー政策を中エネ会議の場で仮にまとめたとしても、それを実行できる担保がありません。日本のエネルギー政策は国家が行うということになっており、地域のことは地域で決めて行こうということは手続き上できません。

参加者のモチベーションを保つためには、中エネ会議が何らかの出口と見られる実現性のある可能性を示す必要があるのではと感じています。

一例を挙げますと、現在、名大の竹内研究室が進めている名古屋市、豊田市を事例に地域のエネルギー（熱源を含む）の地域のポテンシャルを調査し、今後どのような地域のエネルギー政策を進めて行ったら良いのかを中部地域にまで拡大していく。もう一つは、なごや環境大学での基礎講座で取り上げた、名大の杉山範子さんが提案しているEUでの取り組み「市長誓約」。各市町村が「持続可能なエネルギー行動計画」を作成し、自主的に首長が誓約するというもの。2008年から始まり、2013年には5,300を超える自治体が署名しています。この中部版を進めていくようなことが、出口に向かっていく可能性を見出す、ひとつになるのではと思います。

② 人は見たいものしか見ない。見たくないものは見ない。

人間の行動心理上のことです。私自身もそうなのですが、人は最初からある結論を持って議論に挑みます。その際に異なる意見に耳を傾けられると良いのですが、耳をかさない傾向があります。というより、自分の中にあるバリアーがあって聞き取れないのだと思います。他人を理解しようとする力が必要とされます。同じ傾向の集まりは心地良く居られる。アウェイに出かけてまで議論できる人は少ないのだと感じました。

③ ワンイシューでないテーマはハードルが高すぎ？

先にも触れましたが、「原発 → エネルギー → 経済 → 暮らし」とテーマは広がっていきます。当然、簡単には結論は見出せません。TVゲーム、TVドラマのようにインスタントで結果は作れません。長丁場の議論に当事者として居ることの辛さがあるのだと思います。

④ エネルギー問題に対しての当事者性の希薄さ。

いくつか考えられる事を挙げましたが、自分自身が避けて通れないという当事者性意識があれば自分事として向き合えるのでしょう。エネルギー問題は当事者性を持ちにくいテーマだどつくづく感じます。

■ 5. 持続可能性から見たエネルギー問題。

私は持続可能性（環境問題）からエネルギーを見ています。時間軸を10年、30年、100年のどこでとらえるのかもありますが、今のエネルギー調達の方法を見れば、化石燃料もウランも枯渇性の資源です。またそれを使用することで汚染問題（CO₂、放射性物質）が起きます。専門家の意見では、石油、ウランのピークアウト年数は多少の違いはありますが、100年先には再生可能な資源をベースにしないと持続可能性はありません。100年先の人たちのための議論は今する余裕がないという気持ちは分かります。私も60年生きてきましたが、100年なんてすぐ先ですよ。枯渇問題と汚染問題と捉えています。

■ 6. 深い信頼関係。

私の中エネを始めた深い部分の動機は、地域の人々の深い信頼による関係を築きたいということがあります。持続可能性を30年以上考えてきて、4年前に気づいた事ですが、その地域に住む人々の深い信頼関係が持続可能性のベースなのだとは今は思っています。

この関係性が切れてバラバラになってしまっています。しかし、信頼関係は日々の「日掛け貯金」の如く日々の人間関係づくりは大変な時間と労力がともないます。気が遠くなりますが、愚直に進めるしかないと思っています。

◆ 賛同人、登壇者、協力者の意見

1. 水野 雄介（協力者） 2013.12.26

■ 中エネ会議での自分のスタンス、こだわり

事務局の庄司さんのお手伝い。実務的に人手が足りない部分をお手伝いしているイメージ。こだわりは、中エネ会議の中身・内容に自分の意思を入れるのではなく、「猫の手」を借りたいときの「猫の手」になることと第三者的な立ち位置で俯瞰的に会議の様子をみたいと思っています。

前者は、これらのお手伝いを通して、外部の方との仕事の仕方やスタンスを eco-T とは違った仕事のやり方や考え方を（資料の作り方やまとめ方などの方法も含めて）学びたいと思っています（自分自身のレベルアップが目標）。

後者は中エネ会議の質問などを聞いていると、「エネルギーの在り方」がよく焦点になっている気がします。しかし、エネルギーの在り方は中部電力さん含めて、「そもそも中部地方がどんな社会になればいいのか。」を個人がどう考えているのか踏まえながら、例えば原発賛成・反対に対する回答を聞く人も必要ではないかと思っています。

■ 中エネ会議 1年間をふりかえって

今年度は、仕事の都合もあり、あまりお役にたてなかった。会議録や会議のテープお越しなど、庄司さんが多くの時間「頭」を使えるよう、できる限り「手（必要であれば頭）」となって会議全体を成功させたい。

■ 今後どのように展開を考えるか？

- エネルギーは、「政治」の影響を色濃く受けるため、政治家や行政といったところとも連携していく必要があるのではないか。
- エネルギー問題は（中・高・大）学生ともコミットしやすい問題ではないか。（政治や社会に興味を持つための手段になりうるのでは。）
- 福島の方含めて、原発を保有している地域の方が原発をどう捉えているのかを知る。
- エネルギーという視点から、地域に目を向けても良いのではないか。

2. 村中 尚樹（賛同人） 2013.12.26

■ 中エネ会議での自分のスタンス、こだわり

スタンスは、自由・中立・公平・客観的です。特に、世論に迎合した安易な『原発反対』は、客観性を失っています。東京・名古屋でのデモのように「皆が反対しているから」という”長いものに巻かれておけば安心”という安易な考えは、自由な発想を妨げます。

そのため、中電・電発など『原発推進』の方の意見によく耳を傾け立場を理解することに、こだわりました。

■ 中エネ会議 1年間をふりかえって

平日、鶴舞の大学等での講座には、1回も参加できませんでした。サラリーマンは、土日祝日

しか参加できません。むしろ年末年始、GW、盆など休暇中の方が、平日より都合がつけやすいのです。テーマは魅力的なものばかりで是非参加したかっただけに、残念でなりません。

■ 今後どのように展開を考えるか？

「無駄なエネルギーを消費しないようにするには、どうしたらよいか」という指針作りをしては、いかがでしょうか。

■ その他、思いつくままに

我々が立ち上がらねば、日本の将来はない！ という強い意志で今後も活動していきます。

3. 井上 祥一郎（賛同人） 2014.1.13

■ 日本で唯一、県庁所在地に原発がある松江市にて

1月11、12日の両日、原子力発電所を抱える唯一の県庁所在地、松江市の島根県民会館で汽水域合同研究発表会が開催されました。2日目の保全再生系セッションで「拝啓 ダムと田んぼの管理者殿ー漁業者・技術者協働の濁水対策提案ー」と題した発表のために松江市にいます。

発表内容は、ダムができた直後から起きる濁水の長期化と、年々増大する堰堤内側の堆積物が時間経過と共に謙気化することで起きる黒色泥障害の対策を貴方任せにせず、ダム管理者等関係者に対して、漁業者と技術者が協働して行おうと呼び掛けました。

東三河の豊川水系設楽ダムの建設の是非の議論についても感じたことですが、何が何でも作るという得体の知れない力の存在を感じます。聞き及んでいる原発の建設に邁進する勢力と同種の力のように、原発再稼働の動きは単に電力業界の都合だけに止まらない力が働いているように思います。

住民の側にも責任があります。今回の研究発表会の研究成果には、セシウム問題など一題もありません。私自身、ダム設置に関係する影の部分に光を当てて、それに対する対策を、「流水客土」法や「ため池の掻い掘り」法など、かつての技術に学ぶことを提案した積もりですが、パワーポイント画面一枚でも原発に対する危惧をこの機会に表明すべきであったと猛省をしています。

昨年、日韓技術士会議で韓国の水原に行きましたが、日本側から原発問題に関するものは1題も無く、質問時間に韓国の技術士から原発問題をどう考えているか？と問われました。質問を受けた演者は個人的意見と断った上で、日本のエネルギー供給に原発は必要だと思ふと答えました。これに対しては、そういう意見もあるが、放射性廃棄物の技術的な解決が見込まれない原発は、技術の面からも止めるしかないとの意見を述べました。今回の発表資料作りの時にこのことを思い出すべきであったのです。

毎年12月に浜松の東京大学水産研究所で「浜名湖をめぐる研究者の会」が開かれますが、退官したばかりの会を主催してきた鈴木穰元教授は、手弁当て福島で池から移動しないコイを材料にして放射性物質の経緯を調べられ、昨年の会で初の発表をされました。この姿勢に改めて学びたいと思いました。この発表にはマスコミも取材に訪れていました。

1984（昭和59）年樹心社発行の川辺茂著「魚は人間の手では作れないー原発で苦しむ漁民の立場からー」を読みました。著者は敬虔なクリスチャンで、能登半島の西海漁協の組合長で、市議員も勤められた漁師で、56歳で「能登の原発を考える会」を設立されました。自分もこんな語り方をしたいと思うので、以下に長すぎる引用をします。

『一海は誰のものかー ところで、私は消費者の皆さんに訴えたいのですが、先ほど申し上げ

ました通り、漁民はとにかく海を売りたいんじゃないのです。私は消費者の皆さん、国民の皆さんに訴えることになりませんが、我が国の食料というものを、皆さんどう考えておられるかということにつきると思います。漁業をする立場から言いますと、消費者の皆さんは日本の魚はいらないと思っただけじゃあないか、魚がいなくなれば外国からもとめればいいというように思っただけじゃあないかという一つの不安があるわけです。本当に日本の魚が、消費者のために、日本の国民のために必要なものなら、放射能で魚を汚染してしまう原発をどうして許すのだろうかということなのです。

私たちが反対運動をする場合、「エネルギー危機」だとか「石油代替に原子力」だなどという話を聞きますと、それに本当に弱いのです。負けそうになるのです。何とか海を守りたい、魚を守りたい、日本を守りたいと思っても、その方を強調されるとどうにも力が入らない。

というのは、そのエネルギーを必要とするのもやはり消費者の皆さんでございましょう。ところが、エネルギーの方は必要だが魚の方はどうでもいいのだということになるとですね、そこをよく考えていただきたい。

私は最近こういうことを考えるようになりました。とにかく漁民は発想の転換をする必要がある。これまではとにかく自分たちの海だから、自分たちがどうしようが、売ろうと買おうが勝手じゃないかということまで海を売ってきたかもわかりません。しかし、そうではございません。やはり海というものは皆さんのものでもあり、国民全体のものでもあるし、子孫のために残すべきものであるはずなのです。ですから漁民は、今、この世代に生まれて漁師するかぎり、この大事な資源というものを一時おあずかりしとるんだという気持ちにならなきゃいけない。このままではこの日本の漁業も滅びるでしょうし、また、消費者の皆さんの生命もあやうくしてしまうんじゃないか。現在の人だけでなく、子々孫々にわたる世代の人の生命もあやうくなってしまふ。だから私たち漁民が今、海は私たちのものではなくて、皆さんの海なんだ、子々孫々にわたる人たちの海なんだというものの考え方に立たないかぎり、とうてい私たちの使命は達成できないということでございます。』

原発を推進する巨大な力に苦悩しつつ、ここにしか解決の道は無いと終生を住民活動に投じるに至る記録です。「魚は人間の手では作れない」という言い方は、自然栽培法の普及に終生を掛けている木村秋則さんというリンゴ農家の方の、「米の一粒も人間には作れない。私たちが出来ることは、イネがおいしい米を作ってくれるようにお手伝いができるだけだ」との考え方で共通しています。

原発問題は常に自身の頭の中にありますが、行動する場が「中部エネルギー会議」が開かれなくなった時点から失われてしまいました。原発事故の記憶が風化したと言われても仕方ないほどで、中エネ会議は、「場」として極めて重要であったことに思い至ります。

振り返ってみれば、最初に中エネ会議の発足がメールで流されたときに、待ち望んだ活動という強い期待を持ったものです。中々予定が合わず、出席できたのは数回にしか過ぎませんが、事務局担当の庄司君が豊田高専での教え子という奇遇が重なり、手元にあった原発関係の書籍を、当時自宅から徒歩7,8分であった下前津の事務局に届けました。

原発への危惧は、風化させてはならないことです。1月23日には函館高専の環境都市工学科講演会で話すことになっています。この機会には、松江での反省に立って若い諸君に訴えたいと考えています。

4. 高橋 美枝子（賛同人） 2014.1.16

■ 中エネ会議での自分のスタンス、こだわり

原子力発電は、一旦事故がおきれば核反応の暴走を止めることができないと言う技術の未完成、定期検査などで常に作業員に被爆犠牲を強いる産業であること、正常運転でも、周辺に微量の

放射能汚染や温排水による環境負荷があり、安全性を完全に保証できる放射性廃棄物処理策がないことなどを考えれば全原発即廃炉で、省エネに努力しつつ必要電力は再生可能エネルギーでまかなうべきであるという立場です。

■ 中エネ会議 1年間をふりかえって

さまざまな立場の意見を出し合い、討議する中で、エネルギー問題の解決を見出したいと思い、2012年度は中エネ会議と市民講座に参加しましたが、2013年度は、特にご案内がなく、終わろうとしています。

事務局世話人を務めるエコプラットフォーム東海は2013年4月から毎月なごや環境大学共育ゼミナールとして「とことんトーク：防災・原発・エネルギーから考える低炭素都市なごや」を開催し、参加者は多くありませんでしたが、CO2排出削減を目指す中でのエネルギー問題を討議してきました。

■ 今後どのように展開を考えるか？

対立する立場の意見を出し合うことで、合意の場を目指す努力を続けて欲しいと思います。

■ その他、思いつくままに

エネルギー政策は国民の顔色を見つづの流動的なもので、それゆえに、現状を検討し、意見を表明してゆくことは意義深いと思います。ただ対立するだけの会議では、討議する意味がなく、合意形成を目標に掲げ、そのための有効議論の場を用意して欲しいと思います。

5. 後藤 茂昭（賛同人） 2014.1.20

■ 中エネ会議の難しさ

私は、参加した時、「賛成」、「反対」の基本的立場は、変わらなくてもお互いの言い分を聞くことによって距離が縮まればよいと考えていました。結果的には、「二項対立」のままになってしまったと思います。最初から狙うべきところは、「期間を定めた（例えば「新增設反対」とか、2030年までに全廃とか）原発廃止を前提に、その中で再生エネルギー拡大の方策、徹底した省エネ等へ向かうことしかなかったのではないかと思います。最後の反省会で私は、「熊谷徹氏の「脱原発を決めたドイツの挑戦」などをテキストに議論したらどうか」との提案を苦し紛れにしました。

かつて東電の当時副社長であった勝俣氏と飯田哲也氏が行った中部市民エネルギー会議に似たような試みは、「太陽光？」という落としどころがありました。しかし、現状では、二項対立はますます激化し、どちらも納得する中間的な道は、閉ざされてしまったと思います。また、長いブランクは、参加していた人をも遠く離れさせてしまったと思います。

萩原さんや今尾さんのやり方がどうこう言う前に、原発を巡る状況が、ドイツのように冷静に進むのではなくて、「再稼働」か「このまま全停止」か、という極端な進み方をしていることが、日本の不幸だと考えています。そんな中では、「市民によってエネルギー問題を考える」ということ自体が、困難すぎるのではないかと考えています。

継続する場合には、今度は、「再生エネルギーと省エネ」の知識を深め、「環境万博」の成果が残っていれば、それと繋ぐもしくは延長上の活動ができないかなどを考えることなどはどうかと思います。

反原発の人たちは、避けたい話題かもしれませんが、「地球温暖化」は世界的な問題です。昨

年のCOP19で、日本政府は、世界各国が2020年に向けて、CO2削減目標をつくるための討議を行っている中で、1990年比3.5%増という恥ずべき目標を出しました。このこともひどいのですが、このことが国内でさほど問題にならなかったことは、それ自体がもっと恥ずべきことだと思います。

このことを論ずれば、自ずからエネルギー問題になります。私が今まで反原発の人と話した中では、「原子力がなくても電気が足りている。」という裏には「火力発電を大幅に増やしている事実がある」と言う、「温暖化はCO2が原因ではなく、太陽の黒点活動のせいだ。」とか「CO2より放射能の方が怖い。」という反応でした。

お互いにいったんは相手の土俵で話すということが、受け入れられないという状況があります。そういう中で市民会議の進め方も難しかったのではないかと考えています。

6. 渡邊 聡（賛同人） 2014.1.22

■ 中エネ会議での自分のスタンス、こだわり

まず私の立ち位置から明らかにしたいのだが、専門が環境・資源経済学と名乗っているものの、「環境を守るためには！」とか「豊かな自然を守るために！」といった熱い志を持って研究しているわけではない。私の研究におけるスタンス・興味は「環境保全・自然保護という政策（社会における方針）が経済に対しどのような影響を与えるか」といったことがこれまで一貫して研究対象としてきた。

中エネ会議の賛同人を申し出たのも、ある意味上記のようなスタンスに基づくものが大きい。これまで国策民営による原発政策という市民には関係ない、あるいは原発立地自治体以外の市民には関係ないという日本の状況から、より広い市民が関わりあうことで原発・エネルギーのことを話し合うという会議の姿勢に共感したから賛同人として参加した。

多様な観点に基づき社会的幸福を考えるというのは経済学が最も得意とするところだ。この会議への参加において、原発の是非、あるいは脱原発の是非双方の立場について、多様な観点を提供できるように発言したつもりである（出席回数は少ないが・・・）。また、社会に出る手前の大学生の参加を呼びかけ、受け持ちの講義において会議で得た知見を紹介するなど、会議そのものやそこでの内容をアウトリーチする機会を見つけるよう努力した（が、どれほど効果あったかは努力不足の感も否めないと反省している）。

■ 中エネ会議 1年間をふりかえって

会議での講演者のラインナップは多様な立場の人々をそろえ、会議の当初の狙い（多様な立場の人の意見を聞く）は成功したと思う。しかし、結果として参加者たちが多様な価値観を共有し、立場が異なる中で社会的な合意形成をするという形にはならなかったように思う。これは会議を重ねるにつれ、参加者が減少したこと、会議における参加者を巻き込んだ熱い議論にならなかったのが原因かと思う。結果として、呉越同舟状態で発展的議論にならず、中部におけるエネルギーの将来的なビジョンを出せないまま、中途半端なまま終わってしまったのが残念である。

■ 今後どのように展開を考えるか？

参加者を巻き込んだ議論を起こそうと萩原さんをはじめ事務局の方々が努力されたことは十分に理解できる。しかし、結果として十分にそうならなかったのは、（もちろん議論する内容が専門的で難しいということもあるが）参加者における意識の持ち方ではないかと思う。国のエネルギー基本計画もそうだが、「原発の是非」という観点から専門家の議論を聞くのは、結果として専門家の講釈を聞くだけで、原発に関連する専門知識は増えても、社会的意思決定に

いたる判断はできない（3.11 後の日本国民は原発・エネルギーに関する集中講義を受けたとも言えなくない）。そこには個々の参加者が、「どのような社会像を望むのか」「どのような市民になりたいか」という望むべき理想像を踏まえたうえで、中部が目指すべき地域像、さらにはその中でのエネルギー・原発のあり方を議論すべきではないかと考える。すなわち、社会における関わり方やその中で社会のイメージを共有することが、中部エネルギー市民会議として、必要なのではないか。

今後の展開として、会議の参加者における目指すべき地域の姿とその中でのエネルギーの在り方を出し合い、多様な立場を踏まえたエネルギーのあり方を模索していくことが必要と考える。

■ その他、思いつくままに

もちろん上記の意見はあくまで私案であり、呼びかけ人・賛同人の皆さんの意見をお伺いしたいところである。また、何らかの形でこの会議の成果をアウトプットする機会があればいいと思う。

7. 平岩芳朗・福本一（登壇者／中部電力） 2014.1.24

■ 中部エネルギー市民会議 登壇者「この1年の思い」

東日本大震災後の福島第一原子力発電所事故以降、エネルギー供給や原子力発電のあり方について国民的な関心が高まり、当地では中部市民エネルギー会議が設立されましたが、これらの議論には、そのベースとして、エネルギー供給を取り巻く背景をご理解いただいたうえで、多面的に議論していくことが、大変重要であると考えております。

福島第一原発事故で避難されている方々が一日も早く安定した生活を取り戻すこと、同発電所の汚染水対策等は最優先されるべきことはいまでもありませんが、コンセントの先には、以下のような広範かつ重要な課題が密接にかかわっております。

- ① 資源の賦存状況と燃料の安定・安価な調達、エネルギーセキュリティー
- ② エネルギーコストは生活や産業競争力に影響し、産業競争力は雇用にも影響します。特に製造業の多い中部地域の産業界にとって、安価で安定した電力は不可欠です。
- ③ 再生可能エネルギーの期待と導入拡大に向けた課題解決
- ④ 地球温暖化対策
- ⑤ 原子力発電所の安全性の一層の向上、使用済核燃料の再処理・最終処分
- ⑥ 世界の原子力発電の安全を確保するための技術者の確保 など

実際に、全国の原子力発電所が運転停止し、火力発電の焼き増しに伴う化石燃料の輸入増により、年間3.8兆円もの「国富の流出」が続いています。また、エネルギー起源の二酸化炭素排出量は、震災前の平成22年度に比べ+7.4%と大幅に増加しています。

弊社においては、浜岡原子力発電所の全号機停止により、最大限の経営効率化を実施しても3期連続の赤字が避けられない状況になり、電力の安定供給を継続していくため、誠に心苦しい限りですが、お客さまに電気料金の値上げをお願いせざるを得ないという判断に至った次第です。

弊社は、電気事業者として、これらの背景を丁寧にご説明していく必要があると考えております。この意味で、中部市民エネルギー会議において、弊社が説明の機会をいただきましたことは、非常に有意義であったと思います。

お客さまに安全で安価な電気を安定的にお届けするためには、原子力、火力、再生可能エネルギーなどの多様な電源をバランスよく組み合わせていく必要があります。

特に、エネルギー資源の乏しいわが国において、化石燃料価格の高騰や地球温暖化という課題に対処しつつ、将来にわたり安定的にエネルギーを確保していくためには、安全の確保と地域の信頼を最優先に、原子力を引き続き重要な電源として活用することが不可欠であると考えております。

弊社は福島第一原発事故を真摯に受け止め、「原子力発電所の重大な事故を二度と起こさない」という固い決意の下、安全性向上対策などのハード面と、国・自治体と連携した防災対策の強化などのソフト面の両面から安全対策に取り組んでいます。また、その内容を地元をはじめ社会のみなさまに丁寧に説明し、ご理解いただけるよう全力で取り組んでまいります。

8. 平野 克彦（賛同人） 2014.1.25

■ 今後の活動に向けて

1次エネルギーに占める再生可能エネルギー（地熱、太陽光、水力、バイオマス）の割合を高める方を市民の視線で提案することが、先ず必要なことだと思います。1次エネルギーの括りではバイオマス資源の利用システムの確立及びその円滑推進（森林廃棄物間伐材リサイクル、紙、薪、炭、食品その他のリサイクル）してその比率を高めること。2次エネルギーの電気については再生可能エネルギーの比率を高めることは急務ですが残念ながら日本ではその比率8.5%は大型水力発電によるものです。中部地方では再生可能エネルギーの比率を高めるには、特に水力発電の開発が最大のものではないかと思っています。

そこで一つの提案として愛知用水の水路網の活用が考えられると思います。小水力発電所を市民の視線で水路網各地につくる。（市民と行政が一体になることが不可欠ですが。）

追伸

かねがね考えることに除染の問題があります。除染は放射能をただ単に右から左に取り除く（remove）行為に他なりません。環境全体の放射エネルギーに変化はありません。中間貯蔵施設、最終処分場も決まっていな中で除染をするのは全く無意味なことです。これに莫大な年度予算がつくことは賛成できません。年間1000億（税金）もの予算を執行できますか？注視していく必要があります。放射エネルギーを減らすには時間しかないと考えています。放射性同位元素の半減期（物理的に半分の量になる期間）を把握することだと思います。問題になるのは放射性ヨード、セシウム、ストロンチウム、プルトニウムであろうかと思っています。それらの半減期は放射性ヨードは2～3週間、セシウム、ストロンチウムはおおよそ30年間、プルトニウムは2万年？、ヨードは2～3カ月、セシウム、ストロンチウムは100～120年、プルトニウムは？万年で10分の1程度にはなる。でも放射エネルギーは残っているんですよ。フクシマ原発のメルトダウンはそれほど大きな問題と思っています。

9. 前田 洋枝（賛同人） 2014.1.27

■ 中エネ会議 中間報告に寄せて

中部エネルギー市民会議が発足してからこれまでの約2年間、原発やエネルギー政策への「国民的議論」が必要との掛け声だけは残っているものの、状況は大きく変わっています。

2012年夏の「討論型世論調査」の実施など、民主党政権では曲がりなりにもエネルギー政策

において異なる立場の専門家からの情報提供と市民の議論の機会を用意し、その結果を参考にエネルギー・環境戦略を策定しました。一方、現在の自民党政権では「国民的議論」という言葉こそ使っているものの、熟議の場を作る動きはなく、エネルギー基本計画の作成プロセスは従来型に後戻りをしているように見えます。ただし、2013年12月に公表された総合資源エネルギー調査会基本政策分科会からの「エネルギー基本計画への意見」では、最後の「第9節 国民各層とのコミュニケーションとエネルギーに関する理解の深化」の「2. 双方向的なコミュニケーションの充実」で、「国のみがエネルギー政策の立案・運用に責任を持った形にするのではなく、地方自治体、事業者、非営利法人等の各主体がそれぞれ自らの強みを発揮する形でエネルギー政策に関与している実態を踏まえ、これらの主体を新たに構築していくコミュニケーションの仕組みにしっかりと位置付け、責任ある主体として政策立案から実施に至るプロセスに関与していく仕組みへと発展させていくことが重要である。例えば、多様な主体が総合的に議論する枠組みへの実現に向けて、まずは全国の自治体を中心に地域のエネルギー協議会を作り、多様な主体がエネルギーに関わる様々な課題を議論し、学び合い、理解を深めて政策を前進させていくような取組について、今後、検討を行うこととする。」として、地域で多様な主体がエネルギー政策を議論する仕組みの必要性を認めました。

こうした状況において、中部エネルギー市民会議が、「地域の人々が信頼できる議論の場」として、「地域が考える今後のエネルギーのあり方については幅広い議論を行う」（設立趣意書より）ということを手探りでやってきて、それを継続・発展させることは、今まで以上に、意義を増しているのではないかと思います。（地域エネルギー協議会がどのようなものを具体的に考えられているのか分かりませんが、その「お手本」になるような）

私自身は、2012年度は別のプロジェクトで、そして2013年度は私事で多忙だったため、賛同人に名を連ねさせていただいたものの、何度か講座に参加者として参加させていただいたり、環境関係の授業で中エネ会議が行なわれていることを学生に紹介したりするくらいしか、関わりを持つことができませんでした。

しかし、「その気になればできること」はもっとあると思います。大学に身をおく立場からすれば、私自身が関わるだけでなく、学生も参加者として、あるいはプロジェクト活動として運営側にも巻き込みながらということを考えていたら、どんな形がありうるだろうかと考え始めたところです。まだここに書けるほどではないですが、ありうる形はぼつぼつといくつかあり、早くお話できる形にしたいものです。

10. 荻田 章（賛同人） 2014.1.27

■ 今後の活動に向けて

中エネ会議が非常に貴重で有意義な議論の場、情報共有の場であることは間違いありません。地道な取り組みに深く敬意を表します。

① 日本という巨大な井の中の蛙から脱却を。

日本でエネルギー議論が盛り上がらないのは、震災後もエネルギーが切迫していないからだろう。原発はなくても大丈夫という意見が増えるよりも、そもそもエネルギーは無限であるかのような錯覚を生んでいるのではないか。

→ 日本ではなく、本当にエネルギーが足りない国の状況を伝えたり、電気が足りなかったら何が起こるのか体験してもらったりするのはどうか？

② 裏の裏を突く情報共有をお互いにしてほしい。

脱原発派も、自然エネルギー派も我田引水なデータや事例の紹介の仕方をしていないか。そういう水掛け論争からどうやって脱却するのか。「こういうメリットもあるが、こうい

うデメリットもある」という発表形式を義務付けてはどうか？

→ 例えば最近発表されたドイツのエネルギーミックス。再生エネは過去最高だが、原発微減、石炭微増という現実。

原発側も日本経済が原発抜きで順調に再生している状況や、この先原発抜きが続いたらどういふ状況になると予想されるのかきちんと分析してほしい。

なかなか画期的な知恵は浮かびませんが、参考になれば幸いです。

11. 山田 寿男（賛同人） 2014.1.27

■ 今後の活動に向けて

中部エネルギー市民会議は、さまざまな立場の人と共に中部電力の関係者が参加し、原子力関連の詳しい説明をするだけでなく、参加者からの質問に対して真摯な回答に努力されており、とても有意義な集まりだと思います。また、会場の開催場所として、大学関係者の多大なご協力により、複数の大学施設が利用できることは、当市民会議に大変ふさわしい環境であると高く評価しております。

私は、かつて新聞記者として1980年代半ば、静岡支局に勤務し、中部電力の浜岡原子力発電所や周辺市町村の取材を通じて、「電源三法」に基づく原発を巡るお金の問題に強い興味を持ちました。また、個人的に北海道や青森県へ出掛けた際、泊原発や六ヶ所村原燃施設を訪ね、浜岡原発と同じく、美しい風景のなかに佇む巨大なコンクリート施設や立派な道路設備などに、強い違和感を覚えました。そして、原発を日本に持ち込んだ歴史的背景を調べるに連れ、「原子力の有効活用」のスローガンが、戦後日本の復興と発展に大きく寄与していたことを、改めて実感しました。

また、原発を含め現在の日本のエネルギー政策の今の在り様は、他人事などではなく、1954年に生まれ、経済成長の恩恵にどっぷり浴してきた私自身に突き付けられているとても大きな問題であると実感しています。

今後のエネルギー政策は、個人的に言えば、現在の電力会社がほぼ独占する体制を改め、多様なエネルギー源から使用者が何を利用するのか自由に選択できるシステムに転換し、いわば「地産地消」に近い形で発電～消費する方法に変えるのが良いのではないかと思います。

これは、かつて私が豊川流域下水道の取材を通じて感じたことと同じです。巨大な集約型施設を中心とする電気エネルギーの一元管理体制は、もはや時代に合わなくなっているのではないのでしょうか。インターネットのように各地に小・中規模のエネルギー拠点を設け、家庭や企業に蓄電施設等を置き、利用者が費用対効果を踏まえて自由に選択できるような電気料金の体系も取り入れるのが、望ましいと考えます。

中部エネルギー市民会議は、「2011.3.11」を大きな契機とし、戦後日本が構築してきたエネルギーに関するシステムを、市民のレベルでもう一度考え直そうというのが原点であると、私は捉えています。そのためには今後も、一般消費者や電力会社を含め幅広い関係者が参加し、議論を積み重ねることができ活動の継続を期待いたします。

さらに、どこかの時点で、中部エネルギー市民会議が主催者となり、原発の存廃等を含め、エネルギー問題に関する「市民投票」を行うことも提案いたします。

12. 中川 卓治（賛同人） 2014.1.27

■ 今後の活動に向けて

外交、防衛などの政策全般で自民党支持者。しかし原発再稼働を推進したい自民党のこの政策は賛同しません。

当会には脱原発、即時ゼロを明確にしてほしい。電力会社の株主ですが、苦渋の決断です。

放射性廃棄物の処分も進まず、科学者がこの先研究を重ねても、事故が1%でも発生しないと保証できますか？責任はだれもとれません。

人間の生命をおびやかす危険な原発の存在は必要性ゼロです。経済成長、電力需要、コスト、原発推進派の主張、特に数字を並べたてる説明はこのあたりで終わりにしましょう。

やるべきことは、省エネ、再生エネルギーを普及させる研究、政策を強力に展開することです。

東京都知事選での小泉・細川元首相の原発についての主張を応援したい。

追記。小規模水力発電の実践者の資料まとめ、実践者を招いての講演会を提案します。

13. 鈴木 夏織（賛同人） 2014.1.27

■ 中エネ会議での自分のスタンス、こだわり

私の仕事は演奏家です。日常的にPCを使いスコア楽譜を書いています。また演奏の現場は電気が必要です。音響も照明も電気楽器も会場設営の、実際に「なんにもかも」電気が必要です。アコースティック楽器をしていても、実は電気がなければ音楽家は存在できないのが現代。CDの編集も機材を使う。プレス工場も家庭の再生装置もしかり。電気に全くお世話になっております。このことはいつも頭にあります。

でもこれは、現代に生きているならば誰も同じことですよね。私も、私の家族も、生徒さんも、仕事をくれる代理店さんも、移動に使う地下鉄も。いろんな形で電気を使用しています。

萩原さんから会議の構想を伺った時に、何かの形でお手伝いしたいと強く思いました。それは普段、電気にお世話になっている自分たちだからこそ、専門の方の意見やお話を伺い、勉強していきたいと強く思ったので、賛同人として手をあげました。

会議ではいつも、受付や準備等のお手伝いをしていました。そういうことでまずお手伝いしていくのが大事かなと思ったからです。受付をすることで、参加者さんとも仲良くなれたので良かったのですが、来なくなる人のこともわかってきました。

女性はたいていの場合、「母性」というものが強くあります。震災後の事故の時はその母性ゆえに、かなりな関心があったと思います。子供を守るために必死になるのです。それで最初のほうは、お母さん方の会議参加は多かったように思います。でもこの母性は、外敵が直接に攻撃をしてこないとなると、ひとまず引っ込みます。急なことがないのなら、また明らかに自分たちのパワーやネットワークが役立つ可能性が見いだせないのなら、この状況が社会全体に出てきたときに、女性の会議への参加者は減少していったと思います。

会議に魅力がなくなっていったからではないと思います。震災と原発のことだけで社会は動いているわけではないので、日々のことに気持ちが移っていくのは当然なことでしょう。

女性の参加者が減少する傾向にありましたので、余計に私は会議に参加をしていました。仕事

をやりくりし、振り替えて、2012年の後半はほぼすべての会議に出て受付をしました。そして会議終了後の雑談会にも、極力参加しました。そういうことも大事なことだと思ったので。

なお、私自身は震災の2か月前、2011年1月に身体を壊して治療中でした。そんな中でしたが、女性参加者が減ることについてはよくないと思ったので、無理してでも会議に出ていました。一度決めたことなので、テキトウにするとか、うやむやにするの嫌だったんです。

■ 中エネ会議 1年間をふりかえって

受付の席に座っていて、そこからですが、いろいろ勉強できました。各方面からの多様なものの見方を教えていただき、音楽バカの自分にもわかることが多々ありました。これは2012年の中エネ会議の目標とも重なることでしょう。私に関しては家庭内でも、仕事の現場でも、エネルギーや環境のことについては少なくともほかの人のお話にはついていけました。また、呼びかけ人の方々や、講師の皆さんとも不思議な連帯感みたいなもので、友情が芽生えました。音楽関係の友人知人がほとんどの自分の生活に、いろいろな世界の知り合いが増えたのです。

会議は2013年になり開催されなくなっていたのですが、会議で知り合った方々とは仲良くしていました。立場は違うけれども、信頼感がある中で意見を言いあえる場面が多かった。会議が開催されないことはとても寂しいことでしたが、静かに見ていました。時間が必要なとき、ってあると思うので。

■ 今後どのように展開を考えるか？

良い言い方ではないかも知れませんが、会議が立ち止まっている状況、なんですよ？ それは必要なことだったと思います。何事も流れがあるので、必然だったと思います。

今後は、会議は継続してほしいです。継続したい人がそうしたらいいと思います。ほかの地域ではこういう会議はないので、やめてほしくないです。途中で投げ出すの嫌なんです。

どこまでできるのかわかりませんが、やめないで続けてください。

■ その他、思いつくままに

昨年、福島県川内村に演奏の仕事で行きました。京都大学医学部大学院の川内村プロジェクトの予算で、経費などを自分が出さない出張しました。そのときには震災がおきてから2年経過していなかったもので、世の中は被災地に関心が多かった。私自身は余震が多い地域にでかけることへの健康不安もあったのですが、奏者としてオーダーがあったことで決心してでかけました。出かけるからにはと、かなり勉強していきました。被災地の方が書かれた本を読みまくり。時間があれば YouTube で映像を見たり、かなり事前勉強しました。この勉強が、中エネ会議での知識と重なり、ずいぶん役立ちました。人の考えも感覚も千差万別、多種多様だからどんな事柄も簡単な答えは出ない。奏者としての自分ができることは、まずは被災地の方の気持ちに寄り添うことでした。そこでは愛知に住んでいた時分からは、ずいぶん違う生活ぶりでした。このことはまた何かの機会にでもと思います。

今年になり、川内村の役場の保健婦さんとメールのやり取りがありました。もうじき3月のあの日が来ます。このことで役場の中では不安感があり、仕事が手につかない人も多いとも。そういう中で、忘れられてしまうことへの悲しさがあることを知りました。もう日本の特に西日本の方々、自分たちのことは忘れてしまったのではないかと思うと、悲しい、と。そのような気持ちになっていたなんて、自分では想像できなかったので、申し訳ない気持ちになりました。

私たちは忘れてもいないし、いつも関心を持っているのですが、思うだけでは伝わらないのだな、と改めて感じました。

東北から遠く離れた愛知であるけれど、震災と原発の事故と電気の行方とを、いろいろな立場の人が互いを認めながら、将来を探していく会議。結論は出なくてもいいと思います、それで

も話し合いが尽きたとは思えないのです。全然尽きてないと思います。また、これから当地も震災の危険を考えねばならないのだから、会議はやめないで またあれこれ悩みながらも継続をしてほしいです。

仕事柄、心の動きに敏感です。だれもが心があるのだから、皆大事にされるべきです。特に立場がある方は、それも大事にしてもらいたいです。それを超えて、人と人としてこれからもみなさんとお付き合いできたら嬉しいです。以上です。

以上、全 25 名分（投稿数 24）